	(1)障がいのある人への対応や配慮の現状	(2)障がいのある人とない人がわかりあうための取組み	(3)合理的配慮について	
			好事例	課題のある事例
当事者	<p>(視覚)</p> <ul style="list-style-type: none"> 音に比べて声掛けなどの配慮をしてくれる人が増えたが、まだ声を掛けても無視されることがある。 スポーツ大会や講演会など健常者が大多数を占める場だと、その場で少数者になってしまう障がい者には参加しにくく感じてしまう。また、指導者なども障がい者の参加を想定しておらず、対応が出来ないことが多い。 <p>公共交通機関は、職員研修が行われていることで合理的配慮の提供が出来ている傾向がある。阪急電車では駅員が座席まで案内してくれたことがあった。</p>	<p>(視覚)</p> <ul style="list-style-type: none"> 白杖を持っていることによって周囲の人が自分に視覚障がいがあることに気づき、支援を受けやすくなる。一方で、周りの人が絶えず障がい者として自分を見ることになるため、白杖を持つことには勇気がいる面もある。 	<p>(視覚)</p> <ul style="list-style-type: none"> スーパーで魚を買った時に、店員が調理の手間を心配して魚をさばいてくれたことがあり、気遣いがとても嬉しかった。 道行く人が声をかけてくれることが嬉しい。視覚障がい者は、助けてもらおうにもどこに人がいるかが判らないので、声を掛けてもらえて初めて支援を受けられる機会を得られる。 	<p>(視覚)</p> <ul style="list-style-type: none"> ネットショッピングは、画面のどこにアイコンがあるか分からず、手続きのための画面操作が困難であり、活用しづらい。 市役所から送付する封書や書類には点字を打ってほしい。ダイレクトメールに紛れてしまい、紛失することがある。課名や手続き名の点字があるだけで、他と区別ができる。 エレベーターには必ず音声ガイドを付けて欲しい。 弱視の方が市役所窓口へ行った際に代筆を依頼すると、「ここまで来られたのだから見えていて書けるのではないかと疑いの目で見られ、代筆をなかなか引き受けてもらえなかったことがある。 点字ブロックの上にかバンを置く人がいて困る。
	<p>(難聴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 話の内容をなかなか聞き取れず、3回聞き直しても分からない時は、遠慮して分かったふりをしてしまう。 難聴者には「補聴器を装着しても聞き取りが困難な人もいる」ことを、周囲に知ってもらう必要がある。補聴器は全ての人に効果があるわけではなく、また補聴器によって聞こえるようになる度合いも人によって異なる。 行事やイベントにおける要約筆記の必要性について、理解が広まっていない。チラシなどで要約筆記の有無を確認し、あれば参加するが、なければ内容が分からないので参加しない。健常者だけの集まりに参加することはとても勇気がいる。 職場における難聴への理解は十分ではない。仕事では、音声によるコミュニケーションが中心のため、業務上で必要な確認などもスムーズに行えず、仕事を続けることは難しい。新しい職が見つかって仕事覚えようとしても、教えてもらう段階でまず大きな中途失聴者の場合、発話ができることが、周囲の人にとっての「聞こえないという現状」に対する理解の妨げになり、配慮が得にくくなる。 	<p>(難聴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 自治会に対して、会議における磁気ループの設置や要約筆記の重要性を伝え、周囲に難聴への理解を広げていくことが必要。繰り返し説明することで周囲の理解が得られ、配慮が当たり前なものとして認識されるようになる。 難聴による聞こえにくさがあることを折々に周囲に伝えることが大切。自分のできごとでできないことを予め知っておいてもらうことで、全うできる役割を任せてもらえる等の配慮を受けられるようになる。 	<p>(難聴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 電車で事故が発生して車内アナウンスが聞き取れず困っていた時、隣にいた人が理解のある人で、丁寧に状況を教えてくれて安心でき、嬉しかった。 磁気ループによって、健聴時と同じように歌を聴くことができた。 病院を転院することになった時、自分一人で判断できず困っていると病院側が必要な情報をプリントアウトしてくれて、帰宅後に家族に相談して決めることができた。 窓口で手続きの説明を受ける際、メモ書きを交えて説明してもらったことがある。難しい専門用語は聞き取りにくいので、文字に表してもらえると内容を理解しやすい。 	<p>(難聴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 1対1だと話し相手の口元が見えるので会話ができるが、3人以上になると相手が自分の方を向かないことが多くなって口元が見えにくく、スムーズに話の内容が掴めなくなる。相手が複数人の時は会話を避けてしまうことがある。 友達から「声を掛けても聞こえないのかな」と思われるようになるのは寂しい。 仕事をすることにあたり、まだまだ社会では音声コミュニケーションが中心となっている。難聴の発症によって業務上のコミュニケーションが困難になり、仕事を続けられなくなった。 自治会の会議に参加した時、磁気ループの設置がなく、小さい声で話されたため、内容の聞き取りが出来なかった。
	<p>(ろうあ)</p> <ul style="list-style-type: none"> 外見から判別しにくく、また意思疎通に困難のある障がいのため、周囲に障がいのことをどのように伝え、理解してもらうかに苦労する。 コミュニケーションのとり辛さが非常に大きい。 	<p>(ろうあ)</p> <ul style="list-style-type: none"> 周囲の人との普段からの繋がりが大切。近所で火事が起きた時、近所の人々が代わる代わる声をかけてくれた。町内会の行事に積極的に参加するなど、日頃から健常者と同じ場を共有することを心掛けている。 	<p>(ろうあ)</p> <ul style="list-style-type: none"> 耳マークの設置されている喫茶店があった。障がいに対して理解のあるお店だと思う。聞こえないことに対する配慮をしてもらえると、安心して利用できる。 	<p>(ろうあ)</p> <ul style="list-style-type: none"> 道を尋ねた時、聞こえないことを伝え、伝え方に困ったのか去ってしまう人がいた。
	<p>(肢体)</p> <ul style="list-style-type: none"> 大型スーパーなど大規模店では施設のバリアフリー化が進んでいて利用しやすくなっている。個人商店には段差などのバリアが残っている所がある。 車いす使用者の駐車スペースに駐車する人がまだにいる。障がいについての理解や思いやりに欠ける人が少なからずいる。引き続き啓発が必要。 	<p>(肢体)</p> <ul style="list-style-type: none"> 障がい者自身が外に出て、姿を見せていく、知ってもらうことが大切。車いすスーパーに出掛けると「こんな人がいるんだ」と子どもは興味を持って見てくる。 内部障がい等で配慮が必要なことを示すヘルプマークが十分に認知されていない。 	<p>(肢体)</p> <ul style="list-style-type: none"> 全国障害者スポーツ大会の打合せで宿泊した際、下肢障がいがあることで寝起きが難しいことを伝えたと、ベッドのある部屋を用意してもらえた。 	<p>(肢体)</p> <ul style="list-style-type: none"> 車いす使用者は、エレベーターの設置がない施設は利用できない。 道路について、レンガ敷きや石畳の道は見た目は美しいが、車いすの利用者にとっては凹凸があって走りにくい。 交通ルールのマナー向上が求められる。歩道の幅が狭く、やむを得ず車いすで自転車路側帯を通行している時に、逆走する自転車と衝突しそうになったことがある。
家族会 (知的・精神・肢体)	<ul style="list-style-type: none"> 知的障がいについての理解は十分に広がっていないように感じる。外出先でパニックを起こした際に救急車を呼ばれたことがある。善意で呼んでくれたとは思いますが、呼んでくれた人が立ち去ってしまったこともあり保護者が救急隊員に対して謝ることになった。 公共交通機関の待合室で、職員から「本当に大丈夫ですか？」と何度も聞かれ、最終的に旅行を諦め帰宅した。障がいに対する理解不足から、必要以上のリスク回避になっていないか。 病院を受診する際、本人の状態が不安定になり、診察室に入れないことがある。プライバシーの問題から診察室内でしか診てもらえないこともあれば、障がい理解のある医師の中には診察室外に出てきて診てくれることもある。 投票所に会場の見取り図があって良かった。 入口が狭かったり、イスが固定されているなど、車いすで行けない飲食店が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域に知的障がい者が暮らしていることを周囲に知ってもらうことが大切。公園など地域の中に出ていき、交流する機会を持つようになっている。 	<ul style="list-style-type: none"> コンビニで、店員からとても丁寧な対応を受けた。施設が近くのコンビニに対して、障がいのある人の利用があることを事前に説明しておいたことが、店員に共有されていた。安心して社会と接する機会があると嬉しい。 スーパーに何度も通う内に店員が覚えてくれ、本人に声を掛けてくれるようになった。混雑時に別のレジに案内してくれるなど、配慮をしてくれる。 美容院に行くと、入り口の段差で車いすを持ち上げて店内に入れるようにしてくれる。 「スーパーに行ったら必ずチラシをもらって帰る」ということこのこだわりを店員が理解してくれ、チラシを置いていない日でも、貼ってあるチラシをはがして渡してくれた。 子どもが公立小学校に通っているとき、小学校や教育支援センターが連携して、学校行事に参加できるよう配慮してくれた。 	<ul style="list-style-type: none"> 券売機で切符を買う際、操作が分からずもたもたしている、後ろの人に「はよせんかい」と言われた。ショックを受けて、外出することが億劫になった。 保育所の入所申請の際、市の窓口で「障がい児を抱えて働いている例はない」と言われた。3歳になってやっと入所できた。 自閉症の子どもが小学校に入学する際、校長先生が「こんな子を預かって何かあれば、私が責任を問われる」と言われ、周りの保護者と協力して作成した嘆願書を受理してもらえなかった。 小児科の待合室で、そばにいた子がこちらに来そうになった時、その子の母親から「あっちに行ったらあかんよ。恐いから」と言われた。 車で追突事故があった際、相手方保険会社から、症状が事故の影響によるものか障がいによるものか分からないという理由で、補償を外されそうになった。 銀行のATMコーナーの非常ベルが、車いすから手の届かない高さにあった。 アパートを探す際、精神障がいがあることを大家に伝えると、障がいを理由に入居を断られた。 精神障がいは外見から障がいの有無の判別が難しく、状態が不安定であることが多い。職場に障がいについての理解がないと、仕事の継続は困難。 身障者用トイレを設置しているが、そこに行くまでの道が砂利道のためバリアとなっている。(寺社)
商工 事業者 観光関係	<ul style="list-style-type: none"> 事前の調整がある場合は、できる限りの個別対応をしているが、紅葉のシーズンなど参拝客が多く、不特定多数が利用される場合は対応しきれないのが現状。 		<ul style="list-style-type: none"> 老人ホームの方々から来訪される際は、車で近くまで行って参拝できるルートを案内するなど、個別の対応をしている。 	
公共交通			<ul style="list-style-type: none"> 新車導入時に、国交省の標準仕様ノンステップバス認定を受けた車両を導入している。 	<ul style="list-style-type: none"> バス車内に車いすスペースが1台分しかなく、車いすの方が2人以上乗られるとなった時に、1人に次発便を案内せざるを得なかった。
文化芸術 スポーツ 関係団体	<ul style="list-style-type: none"> 絵画やバレエなど多様なサークルがあり、受け入れ状況はそれぞれのサークルによって異なる。参加希望があれば受け入れると思う。 支援学校等、知的障がい者のいる団体が勝竜寺城公園の見学に来たことがある。どの様に対応すればよいか分からなかったが、先生から事前に「説明中によそを向いていることがある」「じっとしていられない子がいる」と説明を受けていたので、対応できた。 ガイド依頼があれば障がいのある人のいる団体という理由で断ることはない。 障がい者団体が体育館を利用する際、利用料の減免措置を適用している。 ころかuppや障がい者スポーツフェスティバル、卓球バレー大会など、障がい者のスポーツイベントの開催会場として運営を支援している。 	<ul style="list-style-type: none"> 自閉症の人が描いた絵の色使いに驚かされたことがある。原色を多く使うなど、個性的な色使いをするので、一緒に活動する中で学ぶことがあると思う。 障がい者団体からのガイド依頼が年5〜6回になっているのは、遠慮があるのこともかもしれない。受け入れのノウハウは蓄積してきているので、問い合わせには前向きに応じたい。遠慮せず依頼してほしい。 近隣の障がい者支援施設利用者のグループが、散歩の際の休憩場所として体育館を利用している。声掛けなど、小さな交流から始め、関わり方を学んでいきたい。 府の卓球バレー大会において、交流の観点から、ルールにチームメンバーに健常の支援者を含めることとしている。以前から障害者支援に関わりのある方が参加することが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 記念文化会館で合唱のコンサートを行う際には、車いすの方用の鑑賞スペースを設けている。 視覚障がいのある人への案内で、どう説明しようか迷っていたが、付添いの人から「鳥居を手で触ってみては」と助言を受け、手で触れて感じてもらうことができた。 参加者に聴覚障がい者がいる場合、大まかな説明はフリップボードに書き、視覚情報で伝えるよう工夫している。ガイドの細かい口頭説明の内容は手話通訳者の力を借りて伝えてもらっている。 高齢者や障がい者など、体力のない参加者がいる場合、歩くペースを遅くしたり、観光するコースを短くする等の調整をしている。 スポーツセンターにおいて、障がい者スポーツの用具(サウンドテーブルテニス)を配備している。 	<ul style="list-style-type: none"> 寺社等には段差があって車いすでは見学することが難しい場所がある。面白い逸話のある場所があっても案内できないことがある。 体育館にはオストメイトのトイレ設備が整っていない。 体育館敷地内において、一部段差が残っていて車いすで移動できない場所がある。
行政	<ul style="list-style-type: none"> 日常業務の中で、筆談、読み上げ、代筆など、その場に応じた配慮を心掛けている。 	<ul style="list-style-type: none"> 物理的、制度的な社会的障壁について知り、市が提供できる合理的配慮について部署を超えて共有していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> イベントでの情報保障や申し込みにおいて口話の困難な聴覚障がい者でも手続きが取れるようFAXで受付が出来るように配慮している。 	<ul style="list-style-type: none"> イベントや講演会などにおいて、情報保障やバリアフリーの会場の用意、広報が不十分などがある。
ワークショップ (WS)	<ul style="list-style-type: none"> 障がいがある人をどのようにサポートすればよいか分からない。 	<ul style="list-style-type: none"> 障がいのある人とない人が交流できる場、話し合える場がほしい。 子どもの頃から障がいについての教育をしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 買い物をする際、店員に聴覚に障がいがあることを伝えたと、メモを取りながらこちらの要望を確認してくれたことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 身障者用のトイレやエレベーターが不足していると感じる。行先によっては整備されていないことがあるので、移動経路など慎重にならざるを得ない。

※医療・介護、人権、消防、ボランティア団体については今後実施予定。

	(4)情報・コミュニケーションの支援についての課題	(5)障がい者基本条例に期待するもの(盛り込みたい内容)	(6)どんなまちになってほしいか。	(7)その他
当事者	(視覚) ・エレベーターやATMなど、様々な場面で音声ガイドを頼りにすることになる。 ・路線バスに乗る際、 <u>路線図の表示が読めないため、周りに聞く人がいない時に乗車口で行先のアナウンスがないと行先の異なるバスに乗ってしまうことがある。</u>	(視覚) ・外見では判別できない障がいもあるので、 <u>偏見を持たず相手のことを正しく理解しようとする気持ちが育まれるように啓発してほしい。</u>	(視覚) ・障がいのある人となない人が、普段から一緒に活動する機会をもてるようになればよい。普段からの人間関係の中で、自然と障がいへの理解や接し方が身に付くと思う。 ・先進国のアメリカなどでは、周囲が自然と障がいのある人に手を差し伸べるため、設備面は必ずしも充実していないと聞いたことがある。自然と一緒にできることがもっとあるといいと感じる。勉強会など互いの心の部分が溶け込めるようなきっかけづくりをしてほしい。	(視覚) ・市役所を新庁舎に建て替えると、今までと部署の配置が変わることになる。移動経路を把握し直す必要があるため、レイアウトが出来た時には情報がほしい。
	(難聴) ・パソコン要約筆記の実施が必要。より多くの情報量の保障に期待する。 ・要約筆記者をたくさん養成してほしい。磁気ループを使っても聞こえない難聴者もい ・各種申込は、FAXで受付できるようにしてほしい。電話のやり取りが困難だが、飛行機のキャンセル手続きなどでは電話でしか受け付けてもらえない。 ・市の窓口には小さなホワイトボードやメモなど、書いて説明する体制を整えてほしい。電話でのコミュニケーションが難しい。相手の話を聞いたり間を合わせることができず、一方的に自分の話をしてしまうことがある。 ・電車で事故が発生した時、駅員が口頭でのアナウンスしかなかったため、状況が把握できなかった。現状や運行再開時刻などは、 <u>電光掲示板に文字情報で状況を説明してほしい。</u>	(難聴) ・イベントや会議など、 <u>社会参加に必要な情報保障について、制度を整備してほしい。</u>	(難聴) ・自治会やイベント、様々な場面で情報保障がなされている、安心して参加できる町になってほしい。 ・市ホームページに、「難聴者と接する際に配慮してほしいこと」についての説明のページを設けてほしい。(口元が見えるように話す、など) ・健常者もいつ自分が障がい者になるか分からない。	(難聴) ・市役所新庁舎を建設する際は、磁気ループを備えた会議室を作ってほしい。 ・市ホームページに、「難聴者と接する際に配慮してほしいこと」についての説明のページを設けてほしい。(口元が見えるように話す、など) ・健常者もいつ自分が障がい者になるか分からない。
	(ろうあ) ・病院、特に歯科の受付において、手話のできる職員が増えてほしい。 <u>難しい言葉は筆談をするので、「痛い」「大丈夫」といった言葉が伝わるようになれば安心して受診できる。</u> ・ATMや駅など、生活のさまざまな場面にある音声ガイドの情報を活用することが出来ないため、文字による情報保障が必要になる。 ・火災や救急などの緊急時にも手話対応があるとよい。	(ろうあ) ・学校で手話を学ぶ機会があれば、手話学習を通して聴覚障がいについての理解が深まり、交流が生まれるようになる。	(ろうあ) ・誰でも声を掛けあえるまちになってほしい。困りごとを伝えられる関係、心が通じる関係があることで安心して暮らせるまちになると思う。	(ろうあ) ・交流の拠点となる福祉会館が必要。継続的な交流活動ができるようになる。
		(肢体) ・障がい者の中でも、他の障がいに対する理解を深める必要がある。身体障がい者であっても、その障がいや困りごとは同じではない。知的障がいや精神障がいでは困りごとが大きく異なる面があると思うので、改めて考える機会になってほしい。卓球パレーに知的障がいの子どもが来たことがあった。当初は、関わり方など分からない面もあったが卓球パレーや会話を通じて交流を図っている。 ・人としての温かい心のあり方について、市民の中で考える機会になってほしい。	(肢体) ・障がいについて、身近なこととして考えられる人が増えてほしい。身内に障がい者がいる人は自分に関わりのあることとして考えられるが、身近に障がい者のいない人は周りに障がい者がいるということをもっと認識していない。障がいについて知ることが障がい者に対する理解に繋がる。 ・観光地のバリアフリー整備が進めばよい。車いすの使用できるトイレがない所には外出できない。 ・市内のお店のバリアが解消され、色々なお店に行きやすくなってほしい。	(肢体) ・西山天王山駅が出来てから、バスの本数が減ったと感じている。 <u>移動手段に不自由がないことが社会参加に繋がると思う。</u>
家族会 (知的・精神・肢体)	・防災メールは大切な情報だが、文字が小さく情報量が多い。指示の意味を本人が理解し、行動に移せるか分からない。音声アナウンスなどの本人にとって理解しやすい方法を選んでほしい。	・コンビニや小売店に対して、障がいについての啓発してほしい。 <u>日常的に利用する施設が安心していける場所が増えて、活動範囲が広がってほしい。</u> ・障がいのある人が安心して医療を受けられる体制を整備してほしい。 <u>どの医院が障がい者の診察をしてくれるのかわからないので、「病気をしないでほしい」と考えてしまう。</u> ・障がい者福祉についてのこれまでの歩みを振り返り、後退りはしないぞ、という決意を明記してほしい。 ・親亡き後も含めた生涯にわたる支援が必要。 ・権利擁護についても規定してほしい。 ・福祉人材の育成、質の向上が必要。 ・支援事業所では、日々の支援の中で合理的配慮事例の蓄積がなされていると思われる。振り返りを行い、発信をしてほしい。 ・行政との意見交換の場を継続して持ってほしい。	・スポーツや文化等は、障がいのある人となない人が「支援をする人」と「される人」ではなく、 <u>対等な関係で関われる場面、福祉でも家庭でもない交流の機会を持てるようにしたい。</u> ・豊かな出会いのあるまちになってほしい。 <u>日々の暮らしの中で、友達が出来る機会などが当たり前になるように。</u> ・障がいのあるなしにかかわらず、 <u>同じように経験の機会が保障されるようになってほしい。</u> ・障がいがあっても受け入れてくれる習い事が増えるなど、余暇の過ごし方を充実できるようになってほしい。 ・どこで誰と暮らすか自分で決められる社会になってほしい。 ・全ての人が安心して優しい地域になってほしい。 ・こだわりからくる行動を、周りの人が理解し、温かく見守ってくれる社会になってほしい。 ・知的障がい者は経験の幅が狭くなりがち。体験の広がりで好奇心も広がる。 <u>自転車で通所するようになってから今まで関心のなかった天気予報を見るようになった。</u>	誰のための「合理的」なのか。当事者にとって合理的であるべきもののため、支援者にとって都合の良い物に解釈されない様に注意してほしい。 ・知的障がい者にとっての「自分らしい」生活という意味が難しい。 ・親の高齢化が進む中、親亡き後の生活の場や災害等緊急時の支援体制について、地域で安心して暮らしていくための拠点整備が必要。 ・京都府の条例は身近なものに感じないので、 <u>市条例は市民に知ってもらいたい。</u> ・お店のバリアフリー化の助成制度や、障がいのある人に配慮する店を認証する制度などを作れば、事業者による配慮も進むのではないかと。 ・好事例を調べて、事業所や当事者に情報発信してほしい。 ・障がいのある人もない人も交流できる福祉会館があるとよい。子どもの頃から障がいのある人と交流する機会があれば、 <u>偏見や心のバリアが生まれない。</u>
商工 事業者 観光関係		・合理的配慮について商工関係者が理解を深めることで、障がいがある人にとって働きやすい環境が整備され、雇用を生み出すことに繋がる。 パソコンを使った事務作業などを在宅でできる仕事とするなど、仕事の枠組みを整理し直すことで、障がいのある人でも仕事を継続できるようになるのではないかと。 ・市役所から寺社に対して車いすの貸出しがあれば、障がいのある人が来た時に車いすを押す等の対応ができる。		
公共交通		・駅や市の施設、道路を整備する際に、バスへの乗換や移動がしやすいようなバリアフリーの設計にしてほしい。		
文化芸術 スポーツ 関係団体	・手話や要約筆記など、専門的スキルを有するガイドがいなくて、現状では手話通訳者等の手配は依頼者側で行っていただくことになる。 ・総合型スポーツクラブに障がい者の参加を求めていくことは出来ると思う。今ある人的ネットワークをうまく活用していくことが重要で、どのような視点の手立てがあるのかわからないので、障がい者の参加に対して受け手側が負担を感じないよう、障がい福祉側とスポーツ側の両面から説明をしていく必要がある。	・障がいのある人と円滑に関わるために、障がいについての知識など、専門機関や行政からの情報提供を受けられる仕組み作りに期待する。 ・できる範囲で障がいへの対応は行っているので、 <u>条例づくりを通して障がいのある人が積極的に外出するようになってほしい。</u> ・地域にいる障がい者がスポーツの取り組みの中で共存していくようになればよい。障がいの中身がどのようなものか理解ができていないので、関わり方が分からないという課題がある。まずはレクリエーションなどの取り組みから始めていければと思う。	・人の能力をいかにして開花させるか、機会を創り出すことが大切。 ・障がいのある人もない人も、観光ガイドの仕事には、引率する役割だけでなく、事務的な仕事もある。障がいのある人もその力に応じた役割につくことで、力を発揮できるまちになってほしい。	
行政	・手話のできる職員の配属先を把握していない部署があった。来庁の際に連携が取れるよう、再度周知していく必要がある。			・庁舎の構造など、ハード面でのバリアが庁内各所に存在している。市民の利用しやすい場所である為に、庁舎の建て替えの際にはユニバーサルデザインに配慮をする。
ワークショップ (WS)	・障がいに対する情報がなく適切な関わりができない。健常者にとって今回のワークショップのような交流の機会が今後もあればよい。		・健常者もいつ病気や怪我で障がいをもつか分からない。障がいのことを正しく理解し、互いに声を掛けあえる心の通じ合う関係を作ることが大切。 障がいに対する理解が広がることで、心のハードルをどんどん下げていってほしい。 ・啓発には時間がかかるので、 <u>気長に継続的に取り組む必要がある。</u>	・障がいのある人もない人も集まりがあることで良しとしないでほしい。障がいのある人もない人も一緒に交流することでお互いの理解が深まる。